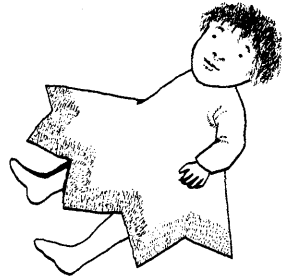


子どもに 育てられる

丹野 禧子



イヌフグリの青い小花、カキドウシの赤紫色の小花に埋めつくされた畑の土を掘り返す。力を込めて土をひっくり返す。春のひざしは私の額に汗をじんわりとよぶ。

「先生！ 何してるの……」
F子がそばに寄ってくる。

「ああ、おいでなすった……」

私は「思うつぼ……」と心の中でニンマリと笑う。私は胸の名札でF子の名前を確認すると、「Fちゃん、何してると思う？……」

「シャベルでほってる……！」
「うん、シャベルでほって何してるんだ？」

「あのね…畑作ってるの？」

「あたり！」

「大変な事してるね」

「大変な事？」

「うん」

「大変な事かもしれないけれど、大変な事頑張ってる後にはけっこういい事があるのよ。きれいな花が咲いたり、美味しいものが食べられたりね

……

「ふーん、いい事があるの」

「そうよ」

「手伝ってもいい？」

「どうぞ！」

「じゃ、シャベル持ってくるね！」

勢い良くシャベルのしまってある物置にかけ出していくF子のうしろ姿を見て、「私の作戦勝ち……」と思う私。しばらくするとF子は小ぶりの作

業用シャベルで私と一緒に土を掘り返しはじめた。

「先生力持ちだね……」

「へへへ、朝ゴハンいっぱい食べたからね」

「ふーん、大人だからと思ったけど……」

「あっそう……」

「私、子どもだから、あんまり力ないのよ」

F子と私の姿を見てM子がやってくる。

「何してるの？」

「畑作ってるの」

「なんで？」

「いいもの作ろうかと思ってね」

「いいもの？……」

「うん！ 種を蒔いたりして、花を咲かせたりとか

……

「私も一緒にやっていい……」

「どうぞ」

「シャベル持ってこよう……」とM子が物置の方へ

かけ出していく。

F子は無言で私とM子のやりとりを見ている。何か不機嫌そうな感じで、表情が動かなくなる……私の顔をジッと見上げながら、「なんでM子に教えるの?」とがめるように強い口調で言う。

「あら、いいじゃない、M子に教えたって」

私のF子に返す言葉も少々強くなる。

私にしてみれば、F子と私の姿を見てこの動きの中に入ってくるM子の姿は、私の計算どおりの姿であり好ましいものだった。

M子がシャベルを持ってきて土を掘り返しはじめる。シャベルに足をかけて掘るのが上手なので思わず、「M子ちゃん、シャベルの使い方上手だね」と言う。

F子は「よいしょ、よいしょ」と声を出す。

F子は「先生一人だけだからね!」と言う。

「『一人だけ?』って何?」と思ったけれど、聞き

流す私。T子、A子がやってきて、「何してる

の?」と言う。「あのね、畑作ってるの」とM子が答える。「そうよ、畑作ってるの。けっこう大変だけれどね、あとでいい事あるからね……」と私。

「いい事?」T子とA子が聞き返す。

「うん、畑作るのは大変だけど、種を蒔いたりするとね、きれいな花が咲いたり、美味しいものが食べられたり、後からはいい事があるの……」

「私達もやっていいい?」

「うん、どうぞ」「いいよ」と答えるM子と私。

ところが、F子は「一人だけって言ったでしょ! いい事は人に教えるもんじゃないの。どうしてしゃべっちゃうの。もうこれで二度目だからね!」とM子の時よりかなり強い口調で言う。「なんで? いい事教えちゃいけないわけ……!」と私。F子はプーンとふくれてシャベルの手を止める。

E夫とS夫が「なにしてるの?」と声をかけてく

る。

「あのね、畑作ってるの。ちょっと大変だけど、大変な事の後には……」と言いはじめると、「何回言ったら先生はわかるの！もうこれで三回目だよ。仏の顔も三度っていうの知ってる？ いい事は教えちゃいけないって言ったでしょ！」

私の顔をニラムムラのようにして言うF子の剣幕にア然とする私。ムラムラと怒りの感情が湧いてきて「Fちゃん、どうしていい事を教えちゃいけないわけ？ そういうのは心のブス、心のブスは自分で直さなきゃ直らない、毎日可愛いと言っているうちに顔のブスは本当に可愛くなるけど……」なんだかわけのわからない事を言う私。

この場面は、「おもいやり」について知りたいたと、園内研究で取り組むきっかけになったF子との一コマなのです。

「まったくF子って……」がいつの間にか、この園の子どもの心には「思いやり」の気持ち欠けているのではないかと思ひ込むのにはそんなに時間はかかりませんでした。

あれから四年が過ぎてF子にヒドイ言葉を投げてしまったな……とか、私自身の仕掛人としてのイヤラシサとか、思い込みのヒドサ等を反省しうなだれてしまうのですが、あの時点では、私は怒りに燃えていたのでした。「理では動くけれど情では動かない地域だよ」と言われて転動したK園へのイメージは、理に弱い私の心にカギを一つかけてしまい、心を開けないまま、子どもと向き合おうとしていたのでした。

あるがまま、受け止める事の出来ない私は相手の心のスキをついたり、自分の価値観に合わない事を探して、非難してみたりすることで、自分の心のカギに対しての辻褄を合わせていたと思うのです。ナ

サケナイ……。

思いやりの姿は、今を生きる子ども達はあまり持ち合わせていないものなのではないかとF子の姿とダブルさせて思い込んだ私は、思いやりの姿を求めて記録を取りはじめました。「思いやりのある子に育ってほしい」という願いは、K園の親の願いのナンバーワン、市内の十五の園の「こんな子に育ってほしい」の親の願いのナンバーワンなのです。又、K園の教育目標にも「思いやり」の言葉があり、子ども達の「思いやり」をどうとらえ、育んでいったらいいかを探るため、まず、私達がこれが子ども達の「思いやりの姿だ」と思うところを記録しはじめたのですが……。

「思いやり」と「おせっかい」の区別があいまいだったり、保育者のイメージも少しずつずれがある事もわかり、最初の一年は、事例の話し合いも暗礁に乗り上げがちでした。



▲いい事があった！……おもいができた！

「思いやり」とは何だろう……いろいろと文献を調べているうちに、平井信義先生が「思いやり」の精神構造とその発達過程について書かれたもの（大妻女子大学紀要 昭和57年3月・平成3年3月）に出会いました。その中に、「思いやり」とは究極的には「愛」に通じるものであり、「相手の気持を汲む心」とありました。「思いやり」は「共感」に通じ、相手の気持に共感し、共感するからこそ自発的に引き起こされる情緒的なものと理解したときに、俗に言う「目から鱗」が落ちました。

それからは、記録を取るのが楽しくなり、自分達の記録を読んだり話し合ったりする中で、微笑んだり、笑い転げたり、涙ぐんだり、子どもがおもしろく、愛しく思えば思う程、子どもの「思いやり」の姿が溢れる様に見つかる様になったのです。

そして、私自身の心のカギもいつの間にかはずれていたのです。

泣いている子を見て「どうしたの」と問うたり、「なぜなの」と問い詰めたりしないで、泣いている気持ちに共感できる保育者になりたい、子どもの良いところも悪いところも含めて固定観念を持たずにありのままの姿を受け止めていきたい等、自分の保育への指針が明確になってきたなと思うのです。

Fちゃんありがとう！ 「子どもに育てられる」を深く実感したのです。

三年間のまとめの冊子のインクの匂いをかぎながら、四年生になって今は遠くへ転居してしまったFちゃんの顔を思い浮かべている私です。

（習志野市立屋敷幼稚園）